Title	私にとっての全学礼拝
Author(s)	阿部，洋治
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume18, 2003.2 : 138-146
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3213
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

私にとっての全学礼拝

阿部洋治

一　学生の証言を聞いて

「私にとっての全学礼拝」と言うテーマが与えられております。これは、自分が全学礼拝をどのような思いをもって守って来たのか、あるいは全学礼拝をどのように体験して来たか、全学礼拝において何を受けて来たかという問いであります。そこで、まず、率直に申し上げますと、私が全学礼拝において求めて来たものは「砕かれた魂」の言葉であったと思います。そういう言葉に触れる時に私の魂もまた深く満たされたことを思い出します。砕かれた魂は、真実なる意味において、神の救いを知っております。それだけに、砕かれた魂の言葉は、その人の思いつきや思想を語るのではなく、神の救いについて語るのです。砕かれた魂の言葉と言うにふさわしい例として、次に示すような学生たちの証言を取り上げることができると思います。彼らは、傷ついた自分の魂の姿を明らかにしながら、イエス・キリストの救いを語ったのです。彼らの言葉は、極めて素朴で簡潔なものでありました。しかし、その言葉は魂の深みから出て来る言葉であったと思うのです。事実、私は彼らの証言を聞いた時、「この人たちは、

まだ、若いのにイエス・キリストの救いを本当に知っている」という深い感動を与えられたのを忘れることができません。

児童学科九八度生「……私は心身ともに疲れ果て、小学校五年生から学校に行けなくなりました。その時はなぜ自分が学校に行けなくなったのかわからなかったのですが、今考えると人に疲れていたことが大きかったのではないかと思います。そしてずっと人も自分も信じられずに心を硬くして生きていました。『どうせ自分のことなんて誰も分かってくれない』と思っていました。それはとても孤独で苦しい期間でした。高校生になり、私はイエス・キリストの十字架に出会いました。……イエス様の十字架での死は自分のためであり神様はこのままの私を愛し受け入れてくださっているんだ、と素直に受け入れることができたのです。そしてだんだん自分でも自分を受け入れることができるようになり、周りの人にも目が向き始めました。……」

人間福祉学科九八年度生「……ですが同時に自らが犯した罪についても思い知らされました。誰よりも彼(兄)のそばにいたクリスチャンであるにもかかわらず、自分が傷つくことを恐れ、彼がどんなに苦しもうとも、『自分には関係がない』と言った態度をとり続けていたのです。……それから私はその事を反省し、神に祈り、『彼と苦しみをともにわかち合い、クリスチャンとして常に神をおぼえながら生きて行こう』という考えを持つようになりました。……」

人間福祉学科九八年度生「……そんな私が洗礼を受けたのは中学生の時です。環境が変化し親しい友と離れ、表面的なつき合いの友達ばかりになりました。しかもクラスのほとんどの女子が非行に走っていきました。親や教師への反抗やいじめ、万引きなどにエスカレートしていきました。私はどうしていいのかわからず、止めることもできない自分に弱さを感じ、自分が無力であることを思い知りました。罪悪感にさいなまれ、すべての

ことから逃げたくなり、虚しさに襲われ不安な毎日を過ごすようになりました。もうどうでもよくなり学校に行くのが辛く、絶望感が私を支配していました。何をしてもやる気が出なく、その時の私は生きている実感のない、まさにぬけがら状態でした。そんな時に親の手前行っていた教会に行くと、何かがあることに気づきました。……神様はこんなどうしようもない自分を無条件で受け入れてくれ、劣等感で傷つき卑屈になっている心を癒してくれました。……」

二　パウロの経験

砕かれた魂の言葉という時に、まず、想起させられるのは、コリント人への第二の手紙一章三～四節における次の言葉であります。

ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。

ここで注目したいのは、「神に慰めていただくその慰めをもって」と書いてある点です。ここで語られている「慰め」は、砕かれた魂でなければ語ることのできないものであります。自分という主体が徹底的に砕かれ、これまで信頼して来た自分や自分の取り組みのすべてに否という神の裁きが宣告される。そのようにして頼るものすべてを失った魂に響いて来る神の慰め。ここでパウロが語っているのはそういう慰めのことです。

パウロの宣教の言葉の構造を知る意味で同じ章の八～九節に注目したいと思います。「兄弟たちよ。わたしたち

がアジアで会った患難を、知らずにいてもらいたくない」（八節）。これだけを読むと、多くの方々は、パウロは、自分たちが信仰をもっていかに患難を乗り越えたかという話をしようとしているのだと予想させられるのではないでしょうか。ところが、パウロがここで語ろうとしていることはそういう信仰の美談ではないのです。それとは反対に、患難に耐えかねて「生きる望みをさえ失ってしまった」という彼の惨めな姿が話題になっているのです。普通なら、人には隠しておきたい惨めな姿であります。しかし、パウロは、それを「知らないでいてもらいたくない」と書いているのです。このパウロの姿は、先程の学生たちが自分の破れについて真剣に語る姿と似ているのではないでしょうか。パウロも自分たちの破れについて真剣に語るのです。

さらに注目しなければならない重要なことは九節であります。しかし、残念なことに、日本語の聖書はこの大切な箇所をしっかりと訳していないのです。私訳をしますと次ようになります。「それどころか、我々自身は、自分の中に死の宣告を与えられたのです。それは、自分自身にではなく、死人を甦らせて下さる神に信頼するためでありました」。いくつかの英語訳もこのように訳しています。

参考　Why, we felt that we had received the sentence of death; but that was to make us rely not on ourselves but on God who raises the dead (KJV); Indeed, in our hearts we felt the sentence of death. But this happened that we might not rely on ourselves but on God, who raises the dead.(NIV); Indeed, we felt in our hearts that we had received a death-sentence. This was meant to teach us not to place reliance on ourselves, but on God who raises the dead.(NEV); Yea, we ourselves have had the sentence of death within ourselves, that we should not trust in ourselves, but in God who raiseth the dead. (NIC)

パウロは、アジアで経験した患難を彼らに対する神からの「死の宣告」であったと述べているのです。それは、神からの厳しい否の宣告でありました。すなわち、逃れることのできない神の裁きであったのです。パウロたちは、その厳しい神の裁きの故に生きる望みをさえも失ったのです。神によって決定的に打ちのめされてしまったのです。しかし、ここで、パウロは、「それは、自分自身にではなく、死人を甦らせて下さる神に信頼するためでありました」と語っているのです。

日本語訳は、こうしたことを曖昧にした訳になっています。口語訳は、「心のうちで死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとするに至った」と訳し、神の裁きを曖昧にしてしまっています。それに、「自分自身を頼みとしないで……神を頼みとするに至った」ということが、「心のうちで死を覚悟した」ことの結果であるような訳になっているのです。つまり、原文で読む限りは、神の裁きが語られているのであり、さらには、倒れたところから神への信頼へと助け起こすのも神の業であることを示唆しているのに、この訳では、パウロたちに対する神の介入が全く無視され、パウロたちの心理状態が前面に出る訳になっているのです。

新共同訳も同様です。「わたしたちとしては死の宣告をうけた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました」。最初の部分の「死の宣告をうけた思いでした」という訳は、原文に近いと言えるかも知れません。しかし、「死の宣告」を比喩的表現として用いているのであって、ここでの患難が神による「死の宣告」であったとは明らかにしていないのです。後半部分の訳は、口語訳と同じ精神でなされています。つまり、この訳は、患難に直面したパウロたちの信仰の強さを強調する意図を込めているように思います。しかし、この訳は、八節と矛盾するのです。いったい、生きる望みを失った人がどうして神に信頼するのでしょうか。そもそも、失望そのものは私たちを神に立ち帰らせることはないのです。大事なことは、私た

ちを打ちのめす神ご自身が慰めを与えて下さることであります。私たちは打ちのめされて慰められるのでないなら、神の慰めをさえも神の慰めとは取らないで、自分の功績にしてしまうような罪深い者なのです。だから、パウロでさえ、神の慰めの真実の証人となるべく、その魂が砕かれなければならなかったのです。

私たちは、パウロのような人がどうして裁かれなければならなかったのかと思うかも知れません。カルヴァンはこの箇所に触れて次のように記しております。「というのは、肉はおごりたかぶるものであって、自分からすすんで身を低くすることをせず、おさえつけられるまではつべこべ言い張ることをやめようとしないからである。わたしたちもまた、『神の力強い御手』（第一ペテロ五・六）によって打ち倒されるまでは、まことの謙遜に身をゆだねようとすることが決してない」、と。これは、パウロたちにおいても例外ではなかったのであって、「それは、自分自身への信頼の思いをまったく取り去られ、謙遜になることを学ぶためであった。なおまた、この病毒は人間の心の中にこんなにも深く根をおろしているので、神が人間に死をあらわに見せたまわないかぎり、もっとも完全な人たちでさえ、この病毒からすっかりきよめられることができない」。さらに、カルヴァンは、神の御心にそむくところの自己信頼から解き放たれるためには、「（人は）死の判決を受けた者であるかのような状態にまで低められなければならない」と述べております。

三　聖学院大学の理念が期待する言葉

聖学院大学の理念の第一項には「霊的次元の成熟」について語っております。「霊的次元の成熟」ということをめぐって、キリスト教的な人格者を育てるということを思いめぐらす人もあるかも知れません。そのために、キリ

スト教信仰に生きた立派な人々の信仰の生活と働きを礼拝においても語るべきであると考える人々も少なくないように思います。しかし、厳密なる意味において、私たちは、理想的な人間像を目の前に描き出されたからと言って、それで霊的に成熟した人間になれるという保証はないのです。そもそも、「霊的次元の成熟」とは何かであります。それは神関係の回復であり、神との関係における成熟でなければなりません。神との関係の回復なしには、どんな立派な教えも、どんなに魅力的で感動を呼ぶ話も、聞く人々を霊的な成熟には至らせることはないのです。

従って、問題は、「霊的次元の成熟」を可能にする言葉は何かということが真剣なる意味において求められなければならないのです。聖学院大学の理念は、その第二項において、本学の「生命的な源泉」は礼拝にあることを指摘し、さらにそこでは、「聖書と宗教改革者が証しする福音」が語られるべきことについて記しております。そして、まさに、「聖書と宗教改革者が証しする福音」というのは、今、コリント人への第二の手紙において見て来ましたように、砕かれた魂によって証言される言葉なのです。

四　一昨年の学びから

先程の学生たちの印象深い証言に加えて忘れることのできないのは、二〇〇〇年二月一六日に「私の奨励準備」といテーマでなされた全学礼拝懇談会における牛津信忠先生の発題です。そこで、先生はご自分への自戒を込めて、学生に分かり安い奨励をするためという大儀名分の下で、聖書の御言葉からは乖離した「自分の経験談義」になったり、欺瞞に満ちた話づくりになってしまう心の葛藤を語って下さいました。そして次のように指摘されました。「それでも自らの心の奥底では、奨励とは、本当に未熟な私が、自らの弱さを心深くに真実として実感する。それ

ゆえに主を身近に感じることが出来、主の語りたもう言葉に近づくことができる。そのような恵みの時であるとの思いが深くございます。しかし……ともすれば自らの生活のうちに留まり、神の前にではなく、自らの表現欲の前に立ち、自らの言葉をもって語ろうとしてしまう。それのみならず、自らの見栄体裁(それは学識の吐露、美しき言葉、自らの信仰の現実的裏打ち、聞かせるためのさまざまな修飾を施した話の内容づくり等々……)を考え、さらに数限りなくいわゆる工夫を凝らしてしまう」(『キリスト教と諸学』二〇〇〇年、一五巻、一六二頁)。

私たちは、数年前からFaculty Developmentをテーマにしており、今年の正月の教職員研修会においては、これをさらに凝縮して「新しい関係の創造」というテーマで捕らえました。しかし、こうしたテーマは、もはや議論の問題ではなく、本質的には私たちの全学礼拝が新しくなること、そして礼拝で語られる言葉が革新されることを要請しているのではないでしょうか。もっと言うなら、学生たちが負うている傷が、教師である我々自身の癒されなければならない傷であることに気付きつつ礼拝がなされることであります。人間の魂の癒しの問題と真実な意味で真剣に取り組む礼拝へと常に改革されることです。

「新しい関係の創造」は、我々自身に突きつけられている神の否の前で自分自身の傷に向かい合わされるという真剣なる取り組みなしには実現されない課題ではないでしょうか。自分自身に突きつけられている神の裁きを見ないで、どんなに立派な言葉を並べても、あるいはどんなに感動を呼ぶ話を連ねても、さらには、どれほど繰り返して神の恵みや愛について語っても、それは、霊的な生命を生み出す言葉とはならないように思うのです。そして、そうである限り、私たち自身が古い人間関係の中に留まる他にないのです。神が新しい人間関係を形成しようとする時に、私たち自身は、いつまでも古さの中で自分や隣人を見ているということはないでしょうか。従って、語る

言葉も古い人間の言葉の域を出ないのです。とかくしますと、私たちは、変わらなければならないのは自分自身であるにも関わらず、聴衆に向かって変革を求めてしまうことがあるのです。それは、神の裁きを見過ごし、古い自己に固執している姿です。砕かれた魂の言葉を求めなければならない所以であります。